

桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第 5 0 号 2 0 1 4 年 7 月 1 0 日

発行 中部学院大学 宗教委員会 〒501-3993
中部学院大学短期大学部 岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24-2211

「我が行く道 いつかに」

片桐 多恵子 (中部学院大学短期大学部 学長)

本学では、5月14日の「開学記念日」に近い月曜日のチャペルを「創立記念礼拝」として行い、建学の精神を思い起こしながら、創立者の先生方を記念しています。今年の「創立記念礼拝」は5月12日に行われ、短期大学部学長・大学副学長の片桐多恵子先生が語ってくださいました。先生は創立者のご家族でいらっしゃいます。

「主の天使はフィリポに『ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け』と言った。そこは寂しい道である。」使徒言行録 8:26

この聖句では、天使を通して神様が使徒フィリポに、キリスト教を伝道するための道を指示しています。そして「そこは寂しい道である」と説明されていますが、この言葉には深い意味が込められています。英語訳では the

desert road となっています。更にその道の先にあるガザも荒れ果てたガザと呼ばれていた処なのです。人の姿もまばらな寂しい道を通して、行った先も砂漠のように荒れ果てている場所では伝道は困難を極めることが予想されます。普通は選ばない道です。その道を歩くと神様は命令するので、使徒フィリポは自分の知恵によらず、すなおに神様の命令に従います。これから先のことは全く予想がつかないけれども、神様が全てを備えて下さっていること信じて歩み出すのです。その時



龍子先生

の彼の心境は今日の賛美歌の歌詞にある通りだったことでしょう。

わが行くみち いつかに
なるべきかは つゆ知らねど
主はみこころ なしたまわん
そなえたもう 主のみちを
ふみて行かん ひとすじに (讃美歌 21 - 463 番)

これは学院の創立者片桐龍子先生の後継者である片桐孝(たか)先生(短大創立者)の愛唱歌でもありました。今日は創立記念礼拝ですので、お二人の教育に対する情熱とその根底にある信仰。人生観の一端に触れたいと思います。



孝先生とカリオン

龍子先生が目指したのは「世界平和」の実現でした。その基盤は女子教育にありまして、そのために一生を捧げた人です。子どもを産み育てる女たちは戦いを好みません。女性の地位向上こそが平和への道であるとの信念から、女学校を設立する一方で働く女性達のために講演と著作活動にも力を入れました。女性には教育は必要ないと言われた時代です。学ぶことに飢えていた女性たちは、むさぼるようにその本を読み講演を聴いたそうです。

龍子先生は祈りの人であり決断と行動の人でした。高校用の広い土地獲得のために毎朝毎晩座り

込みまでして地主に懇願して手に入れた土地が、戦後の農地改革により所有者が耕していないと没収されることになりました。彼女はなりふり構わず悪臭漂う肥料をかつぎ、田畑を耕して土地を死守したのです。誠心誠意頑張った結果はどうだったでしょう。後継者にと期待した一人息子は33歳で病死し自分自身も占領国の方針により公職を追放されました。正に「寂しい道」を歩むことになり、思いがけず若き孝先生にバトンタッチされます。それがキリスト教主義を基盤とする本学の誕生と発展につながるのですから、神様のご計画は人の知恵を遥かに超えています。

孝先生も祈りと決断と行動の人でした。日本は第二次大戦に敗れ焼野原、学院も存亡の危機にあり、家庭においては父・次女・夫に相次いで先立たれ悲しみのどん底にありました。そんな中で学

院の経営を託されたのです。「存在価値のある学院であれば神様が助けて下さる」と信じて、キリスト教を基盤に学校運営をする決意をします。神様に委ねる、その委ね方は自分では何もしない他力本願とは違います。神様から使命を与えられているのですから、人事を尽くして天命を待つという委ね方です。使命感を持って生きる人は誰もが人一倍の努力家だと言われますが、孝先生もたゆまぬ努力の人でした。

人生の終わりまで脳裏にあるのは学院のことであり、関係者や神様への感謝でした。この学院は、クリスチャンか否かを問わず使命感に溢れる多くの素晴らしい方々を与えられて、ここまで発展してきたことへの感謝でした。キャンパスでは孝先生寄贈のカリオンが、今日も又、私達にエールを送るかのように鳴り響いています。

2011年3月11日以降、本学ではボランティアや様々な形での被災地支援・交流を行ってきました。『桐が谷通信』では、そうした活動をできるだけ取り上げて報告しています。今号では、昨年11月に発生したフィリピン台風の被災地と岩手における支援について報告したいと思います。

フィリピン台風被災地域へ支援物資を送りました

村 上 進 (各務原事務局・職員)

「ご無事でしたか」

それはひとことの挨拶から始まりました。短期大学のコラゾン加藤先生(前教員)はフィリピンの出身。「お里はご無事でしたか」職員の声にコラゾン先生は、「私の生まれ故郷は直撃を免れましたが、卒業した大学のあるパナイ島では多くの友人が被災しました」と答えられ、支援できることはないかとお尋ねしたところ、現地で支援活動をしている友だちに連絡してみると言われました。

数日後、パナイ島イロイロ(レイテ島の西、西ビサヤ諸島)に住む友だちと直接連絡がとれたとのことで、具体的な救援物資の依頼がありました。今現地で必要なのは、夏物衣料、靴、洗剤・石けん、日持ちのする食糧とのこと。直ちに中部学院大学各務原キャンパスを中心に、学生・教職員、図書館やラ・ルーラを利用される地域の方々、各

務原シティカレッジなどで呼びかけたところ、わずか数日のうちに、大量の支援物資とカンパが集まりました。

学生有志が仕分けと梱包に協力

各務原キャンパスでは、学生有志が集まって仕分けと梱包作業を行いました。東日本大震災支援の経験から、現地で支援活動をする人の負担を考



支援物資の仕分けをする各務原Cの学生たち

え、すべて種類別・サイズ別に分け、濡れないようにビニール袋に入れ、それぞれ内容と数量を英語で書いたラベルをつけて梱包しました。11月21日、12月11日、18日の計3日間にわたる作業で、海外輸送専用の特大段ボール箱12箱に詰められた合計約740kgの物資が、パナイ島とセブ島の4箇所の支援拠点に送り出されました。

NPO「KIプロジェクト」の協力

外部の団体「KIプロジェクト」からも大きな協力がありました。「KIプロジェクト」は、東日本大震災の復興支援や、福島を家族を受け入れて岐阜県で行うサマーキャンプなどの活動を行っているNPOで、毎年、本学の学生が参加してきたこともあって、緊密なおつきあいがあります。KIプロジェクトは街頭募金を呼びかけて、総額24万円を超える資金を集めてくださり、新品の下着、懐中電灯、電池、ろうそくなどを調達して届けてくださったうえに、輸送費用も負担してくださいました。

現地からのたより（抄訳）

コラゾンさん、そして支援物資を送って下さった皆さん

巨大台風ヨランダは私たちの村をめちゃめちゃに破壊しました。私たちは泣きくずれ、この大災害からどうやって生き延び、再び立ち上がることができるのだろうかと絶望的になりました。村民の多くは家屋を失い、衣類も穀物も、わずかな貯



届いた支援物資を分かち合う

えもすべて流されてしまいました。

けれども、世界中から多くの支援が寄せられました。あなたの大学からこんなに素晴らしい、すぐに役に立つものが届けられるなんて思ってもみませんでした。みなさんが送って下さった靴と服は本当に助かりました。実は一番必要な物なのに、そういう個人的な物品を手配するのは、どうしても優先順位が最後になってしまうのです。懐中電灯と電池も有り難かった。私たちの村は今も電気が復旧していないのです。これらの品々は私たちがほんとうに幸せな気持ちにしました。

皆さんのあたたかい行動、私たちが心にかけて下さっているという思いを受けとめて、私たちにもまた立ち上がって前に進む強い気持ちがよみがえってきました。

言葉ではとても言いあらわせませんが、私たちの感謝の気持ちをこめて。

セブ島バンタヤン、ゲイワノン村一同

被災を語り継ぐことに寄せて

吉川杉生（社会福祉学科・教員）

「被災地では保育士の流出が続き、子ども支援の現場で支え手が不足している」と、この春に岩手県三陸沿岸を訪ねた共同研究者（伊藤龍仁先生・昨年度まで幼児教育学科所属）から聞いた。首都圏等の保育所待機児童対策で、保育人材確保の一つが東北地方に向けられているのである。

これは、今日の子育て支援施策が、被災地では「逆機能」として作用をしている一例ともいえる

が、気がかりなのは、単に保育士の数が不足するという点だけではない。

私たちは、2011年9月に初めてこの地域を訪問し、子ども支援に携わる関係者一人ひとりに話を伺った。その際、被災から半年を経過し、保育士がその体験を語り継ごうとし始めていたことに大きな感銘を受けた。

津波で多くの建物が失われたこの地域では、救

桐が谷通信



流された保育所の基礎部分



子どもたちと交流する本学学生



被災園の園長に話しを聞く

えなかった命への悔恨が保育士それぞれの心に残っていた。また、記録や写真なども含めてそれまでの保育実践の積み重ねが消失し、自分自身被災者である現実の中で、援助専門職としてのアイデンティティが大きく揺らいでいる様子だった。

そうした中で、「自分自身がその場にいた責任」として、「どこかにそれを伝えなくてはいけない」という声が聞こえてきたのである。その時点では

保育士全体の大きな声とは言えず、そのうちの何人かが時間をかけて辿り着いたちょうどその時に立ち会ったのだと思うが、この地域で保育者として生きる力を再構築する一步になると感じられた。

「語ること・語り合うことが生きる力の糧になる」、それが子ども支援の現場で揺らいでいるのではないかと。それに対して、私たちに出来ることを見つけていきたい。

4月より3名の先生方が宗教委員会に加わっていただきました。新鮮な感覚でチャペルのことなどを書いていただきました。

科学万能と考えている私ですが・・・

子ども学科・教員 山崎 宣次

今年度4月より本学院にお世話になることになりました。ミッション系の学校には初めての赴任です。私は理科教育に携わってきましたので、世の中の全ては科学で説明できると確信してきましたし、今でもそう思っています。もちろん科学で証明出来ないことはたくさんあります。そういうときに、これは神様の仕業に違いないと考える人がいますが、私はまだ科学で解明されてないだけで、時間がかかっても必ず解明できると信じています。

そんな無神論者の私が最初に宗教委員を拝命したときは、正直「なぜ、私が」という気持ちでした。しかし、これも仕事のひとつとあきらめて、チャペル・アワーに参加しました。

県内有数のパイプオルガンによる前奏・賛美歌、中身の深いスピーチ。これらを熱心に聞く学生たち。何かと慌ただしい毎日の中で、この20分間が少しずつ私にとって癒しの時間となってきました。何度も聞く賛美歌は自然に口ずさめるように

なりました。特にスピーチは、様々な講師の方々が無言のうちに温まる話をしていただけます。時として日常生活の中でとげとげしい気持ちになる自分も、このスピーチで優しい気持ちになれます。まさしく「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」(使徒言行録 16:31)なのです。そうです、神様は自分の中にいるのです。義務感で参加したチャペル・アワーも今では私の大切なひとときになっています。もちろんチャペル・アワーは皆勤です。

“Peace be with you.”

子ども学科・教員 齋藤 亜矢

あいさつをしなかった、物を横取りされた、些細なことですぐにけんかがはじまる。いっぽうが泣き出すと仲間が仲裁に入るが、それが新たな火種となり、全体がてんやわんやの大騒ぎになることも。手を出した側は、みんなに責められてしばらくしょんぼり。それでも、やがてあいさつをしながら歩み寄り、ハグをすれば仲直り。お互いをグルーミングし、追いかっこやレスリングなど

